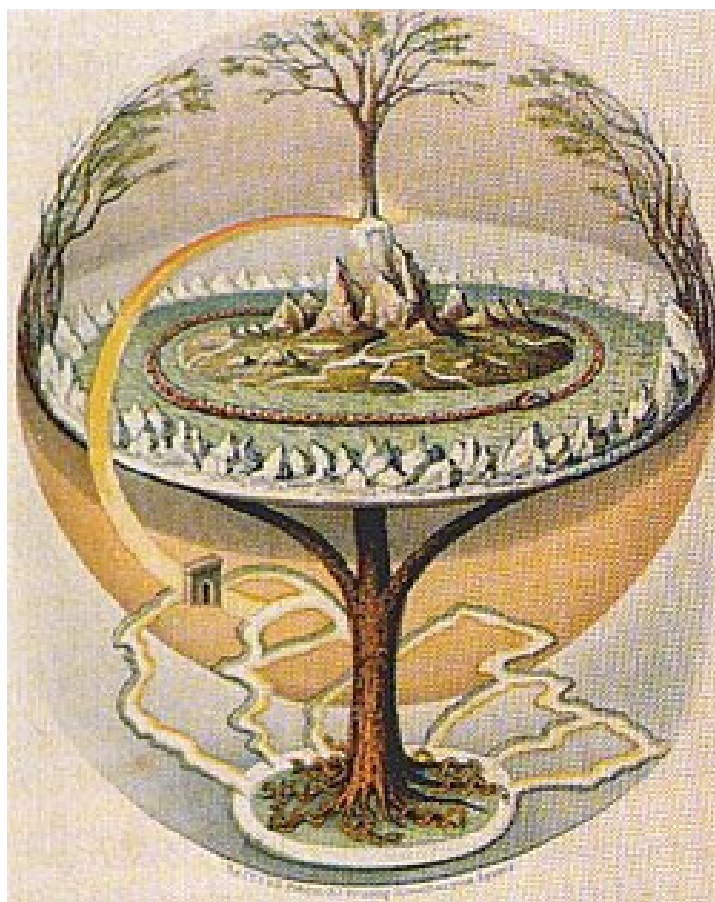


春 分 儀 式

I O S 儀式魔術文書 VE06A



THE OFFICIAL ORGAN
OF
I O S

PUBLICATION IN CLASS D
IMPRIMATUR : M FRATER I O S

THE VERNAL EQUINOX CEREMONY FOR ASTRAL WORKING
I O S ASTRAL TEMPLE WORKING

第1章 解 説

本儀式は、小規模な団内グループ(ロッジ単位程度)が、簡易な準備で行える霊的集合儀式(Astral Temple Working)として作成した。従って、実行儀式よりも簡略化した部分がある。

《春秋分点》は、「均衡と調和」を表象する宇宙的な時刻である。年に2回の分点において、太陽の運行または振動と地上の四大元素が融合する。本儀式は、原則的に春分点の前後48時間以内に実施すること。

儀式内容は、中央の柱の秘儀を中核に春分の祝祭を実施する。

1 中央の柱

西洋魔術において一般的な魔術技法である「界層の上昇(rising on the planes)」は、元来はカバラの木を登る技法、またはより単純化された柱の上昇技法から分化したものである。偽メシアとして有名なサバタイ・ツェヴィはハシディズムの技法を多用したが、ショーレムはサヴァタイ・ツェヴィの修行について「ひとつの階層から次の階層に、そしてゲドゥラーからマルクトまでの7階層を全て上昇していった。2年間かけてこの行を完成させたとき、そこに母を見た。」と語っている。⁽¹⁾もちろん、IT化社会に住む魔術師が界層の上昇に2年もかけるとは思えない。よりコンビニエントな手段が追求されるであろう。

古典古代から中世にかけてのユダヤ教カバラの修行法は、高度な「想像的創造力(Imaginatio Creatrix)」と緻密な記憶力とを必要とした。古代エジプト人が膨大な否定告白のリストを覚えなくても、死者を支援する呪符が保証すると脳天気信じたのとは異なり、天界への上昇を実践した神秘家は、何十もの挑戦する天使等の名前と性質のリストを暗記し、生命賭けで望んだのである。どちらにせよ、想像力が鍵であった。イサク・ルーリアの弟子ハイム・ヴィタルは、神秘家が天界に上昇したときの想像力の機能を『聖なる門』のなかで、次のように語っている。

「人はかれ自身より大切な聖なる靈魂を有しており、その靈魂が神の山において主の御相貌の前に上昇したとき、・・・真実を見て、想像力の機能を介し、これらすべてを遠隔地の肉体に見せるとき、想像力こそ必要であり、(曰く)『預言者を介してわれはイメージを結ぶ』のである。」⁽²⁾

さて、柱について考察すると、そも柱とは屋根を支えるものである。13世紀にラビ・モーゼス・ベン・ナハマン(いわゆるナハマニデス)は、「二重天界理論」を唱えた。ナハマニデスはカバラ研究家に多大の影響を与えた人物であり、かれの二重天界の構想を補完するかたちで14世紀には、上位の天界と下位の天界との間を二本の柱を結び、柱を神の霊が上下するという思想が生まれる。この二本の柱とは荒野を彷徨うユダヤ民族を先導した火の柱と煙の柱である。

この柱を通して正しき者は、天界に上昇できる。柱に面した者は三色の光が解け合う様を見るという。近づく柱は火花を散らし、無数の色彩に溢れる。そして、人を天界の輝きが満たすのである。⁽³⁾

上昇(アリヤー)するためには、場所(マコム)が必要である。⁽⁴⁾まさしく、モーゼス・コルドヴェロによれば「地上の天界は、そこを通じて天上の天界に上昇するための開口部又は門扉である。」⁽⁵⁾

これらの解釈によれば、上昇するための場所は下位の天界であるが、カバリストは聖別の儀式により現出する地上の神殿と下位の天界とを同一視した。⁽⁶⁾

一方、われわれは魔術儀式的基盤になるアストラル神殿にそれを求める。

さらに、柱を登り、天上の神殿、または天界に上昇すると神秘家は神の御前、すなわち「栄光の座」のある広間に達する。

-
- (1) Gershom Scholem, *Researches in Sabbateanism*, ed. Yehuda Liebes, Tel Aviv : Am Oved, 1991, pp.214f.
(2) Elliot R. Wolfson, *Through a Speculum That Shines*, Princeton : Princeton University Press, 1994, pp.321f.
(3) *Zohar* II fol.210a
(4) Maimonides, *The Guide of Perplexed*, Chicago: Chicago University Press, 1963, I : 8, pp.33f.
(5) Moshe Idel, *Ascensions on High in Jewish Mysticism*, Budapest : Central European University Press, 2005, p.118.
(6) Ed. Joseph Dan, *BINAH* Volume 2, New York : Praeger Publishers, 1989, pp.7f.

『大ヘハロース』において、栄光の座に対面する神秘家の性愛的な暗喩を含んだ状況が描かれている。

われにみせし告白を証明せよ
汝が父ヤコブの面にわれがなせしことを
そはわが栄光の座に刻まれし
汝がわが前に見たように、聖なるかな
われはその上に身をかがめ、そを掴み、そを抱擁し、接吻する
その腕の上にわが手は日に三度置かれ
汝がわが前に、聖なるかなを唱えるとき
そは語りき
聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな
(大ヘハロース シノプセ §§ 99 ⁽⁷⁾)

さらにウルフソンは、この件で用いられる「炎」という単語が S h H I A の三人称女性形であることを指摘している。⁽⁸⁾

さて、柱が地上の神殿から上位の天界に駆け上るならば、その軌跡は下界を見下ろす五つの神の相貌(バルツフィム)に触れていくとも言える。イサク・ルーリアの解説する相貌は、次のとおり。⁽⁹⁾

相 貌	名 称	ヘブル語名称	意 味	帰 属
第1の相貌	アリク・アンピン	אֱלִיק אֲנִינִן	大いなる貌	ケテル
第2の相貌	アツバ	אָטְבָּא	父	コクマー
第3の相貌	アイマ	אֵימָא	母	ビナー
第4の相貌	ザウイル・アンピン	זְאוּיִל אֲנִינִן	小さな貌	ティファレト
第5の相貌	ヌクバ	נִקְבָּה	女性性	マルクト

2 司官の配置

(1) 司官の指定

本儀式に必要な司官は、PRAECEPTOR (P C)、すなわち「先導者」の1名である。

P C は、黄金の夜明け団の伝統的な白の法衣を纏い。白のネミスをかぶり、マントやその他の役職記章はつけていない。右手に「ハイエロファントの棒」をもつ。それは神殿を開き、つなげる権威の象徴である。

他の参列者は、内陣団員は白の法衣と白のネミスを、外陣団員及びプロベিশヨナーは、黒の法衣と白黒縞のネミスをかぶり、手には何も待たず参集する。

ディオーン・フォーチュンの内光協会のアストラル神殿儀式では、参集者は儀式場に座ったまま、光体(かれらはアストラル体と呼称)を下位アストラル神殿に投射する。そのとき光体は全裸であり、神殿の着衣の間(Robing Room)において、光の法衣を纏う。

(2) トーラーの宰相の召喚

司官は、マルクト神殿で律法の公爵を召喚し、メタトロンの顕現たる大天使の長上が「肉の衣を去る」までは、実効上の神(天使を使役する者)として活動する。この場合「肉」とは、魔術師の「光体」のことである。

(7) Ed. Peter Schafer, *Übersetzung der Hekhalot-Literatur II* § § 81-334, Tübingen : J.C.B.Mohr, p.18f.

(8) Wolfson, p.101, n.125.

(9) Lawrence Fine, *Physician of the Soul, Healer of the Cosmos : Isaac Luria and His Kabbalistic Fellowship*, Palo Alto : Stanford University Press, 2003, pp.138-141.

3 アストラル神殿の構造

マルクト神殿を使用する。第1項でも説明したとおり、これは地上の天界である。

4 魔術の技法的側面

(1) 黎明視

認知神経心理学の研究成果によると、人間の脳は外部の視覚情報が混乱すると脳内に蓄積された様々な視覚像を投影することがある。視覚情報の混乱は良く見えない場合に発生するので、緑内障等の病気で視力が低下しているとき、或いは暗い場所で物をみようとしたとき、水晶球などの不鮮明な像を結ぶものを見ているときに発生しやすい。これらのエラー・パターンは、⁽¹⁰⁾かなり高い確立で発生する。この視覚情報の混乱による幻視を「シャルル・ボネ諸侯群⁽¹¹⁾」と呼ぶ場合もある。

古来、魔術師はこの原理を熟知して、幻視の導入に使用していた。視覚像の混乱は、古代神オーディンのような片目の賢者の伝説、黄昏時が達魔が時であるとの解説、スペキュラムの利用等に適用された。一方、言語入力 of の混乱による操作には、呪文の反復（単純類似構音の連続による記憶操作⁽¹²⁾）、ゲマトリア等の文字の操作などが多用された。

人間の脳、特に伝統的な秘教的訓練の施された人間の脳は巨大な情報のプールである。

上記の技法は、認知神経心理学の説明した脳の認知プロセスを意図的に混乱させることで、意識が把握できない脳の共有情報（個人的、集合的無意識）を利用するために行われた。

今回は、比較的簡単に実践できる視覚像の混乱を利用した黎明視という技法を適用する。

(2) 呪文の構成

今回使用したのは呪文ではなく聖名である。

5 身辺の準備

(1) 部屋の準備

部屋を暖かくし、プライバシーを保護できるような態勢づくりをする。（家族に部屋に入らないように断ってからドアの鍵を閉める等）、携帯電話、アラームの類はあらかじめ切っておく。部屋の中央に快適な椅子か、ソファを置き、その他の不要なものを片づける。

部屋を薄暗くする。小さな照明を利用する場合は、背後に置き、その光を直視しないように配置する。

何度も反復して練習し、象徴や、儀式の細部まで呑み込んでいても、外部の妨害ですべてが台無しになることもあり得る。準備は、怠りなく。

(2) シナリオ

今回は、シナリオ文書を単純化したので記憶してもらいたい。黎明視の妨げとなるので、テープの録音も不要である。

あなたの行動する部分は緑の文字で記してある。

聖名を発音するときは、注意深く行うこと。

事前のリハーサルは勿論、必須とも言える。

(3) 直前の手順

開始する前に手を洗い（儀式的沐浴）、法衣（または身体を締め付けない服装）に着替え、L B R Pを行って椅子に座り、中央の柱の行法で活性化する。

(10) グザヴィエ・スロン、『認知神経心理学』、白水社、1995年、39-40頁。

(11) <http://jiten.com/dicmi/docs/k12/17252s.htm>

(12) スロン前掲書、63、64頁。

第2章 儀式

1 神殿への入場

この準備的作業は、光体のレベルではなく、生身の肉体で行う。

参加者は、東に面して座り、目をかすかに開き（いわゆる半眼の状態）にする。視線は足下に落とし、家具などの周囲の状況が明確に像を結ばないようにする。瞼を開く程度を変えて、この焦点を結ばない状態を維持する。気持ちが悪くなった場合は、普通に眼を開いて、もう一度調整する。

半眼のまま、深く呼吸をする。呼吸は肺だけではなく、全身の皮膚を通して行う。一息ごとに、喉や鼻孔のみならず、全身の皮膚から、周囲に満ちている生気が肉体に吸い込まれ、全身の細胞を活性化する。

あなたは光のトンネルを通過して、アストラル神殿の外庭に着地し、扉の前に立つ。マルクト神殿のヤキンとボアズの柱を通過し、青銅の扉に面すると、扉の表面に刻まれたI O Sの三文字が内側から光を発し、扉は音もなく両側に開く。

神殿の内陣広間に通じる廊室において、兄弟姉妹たちが集っている。

2 ウシャブティ

先頭に立ち、集まった参加者を振り返るP Cが静かに命じる。「ウシャブティを纏うべし。」P Cは、率先して「小神像（ウシャブティ）」を纏う。

すなわち頭頂の光球から光を拡散し、やわらかな膜のような形に引き延ばして、喉の光球に結びつけ、さらに胸と背を通して、胴の光球を振動させ、腰を振動させ、最後は足下の光球を振動させ、全身をひとつの巨大な光の膜で包み込んでしまう。その無定型のオーラの卵を好みの神、天使、神話的形態に変化させる。この場合は、司官は顔のないアケファロスの姿形をまとう。参加者は、文字通りエジプト神話の代理神像である直立した人間の姿をもつ霊的姿形を纏う。アケファロスの姿形をもつ参加者のひとりひとりには、自ら形成した四大の豊灯が寄り添い四色の光を放っている。

P Cは、廊室の中央の扉をくぐり、本殿に入る。

兄弟たちは、廊室でしばし準備のできるのを待つことになる。

3 物見の塔の儀式

P Cは、祭壇の西側に回り込む。自らのオーラを広間全体に広げる。そして、拡張した白く輝くオーラを保持したまま、小五芒星の追儼儀式を行う。

引き続き、小六芒星の追儼儀式及び物見の塔の儀式を行う。

参加者は、その動きを廊室から、おぼろげな円運動による渦の発生として捉える。詳細なP Cの動作を視覚化する必要はない。

4 入場及び宣言

P Cは神殿の西の壁を背にして、東を向き合図の鈴を鳴らす。

P Cの霊的な鈴の合図で、参加者の入場が始まる。

兄弟たちは右側、すなわち南の壁際に立ち、姉妹は左側、北の壁際に立つ。

P Cは、内側を向いたまま次の言葉を宣言する。

P C：「I O S の兄弟姉妹たちよ。春分の儀式を開始せん。」

5 律法の宰相の召喚

P C：「七つの封印を光体に刻印せん。」

P Cは聖なる名前を唱えたあと、剣指をつくり、揃えた両膝に当てる。

参加者もP Cの動作に倣う。

P Cは聖名とともに唱える「わが脚を封じる。」

全員：「わが脚を封じる。」

P C、参加者は剣指を心臓に当てる。
P C：聖名とともに「わが心臓を封じる。」
全員：「わが心臓を封じる。」

P C、参加者は剣指を右肩に当てる。
P C：聖名とともに「わが右腕を封じる。」
全員：「わが右腕を封じる。」

P C、参加者は剣指を左肩に当てる。
P C：聖名とともに「わが左腕を封じる。」
全員：「わが左腕を封じる。」

P C、参加者は剣指を首に当てる。
P C：聖名とともに「わが首を封じる。」
全員：「わが首を封じる。」

P C、参加者は両手を胸の前で組む。
P C：聖名とともに「わが生命とすべての部分を守護するために。」
全員：「わが生命とすべての部分を守護するために。」

P C、参加者は両手を頭上高く差し出しV字を形造る。
P C：聖名とともに「わが天蓋を封じる。」
全員：「わが天蓋を封じる。」

P Cは封印の完成とトーラーの宰相への呼びかけを行う。
祭壇の傍らにいるP Cの上に覆い被さるように出現する巨大な天使の像がウシャブティを呑み込む。アケファロスの顔のないオーラに、律法の宰相のテレズマ的姿形が融合し、再形成されてP Cの霊的外形が急激に変化する。
P Cが宣言する。

P C：「われは、聖なる五つの文字に表象される無敵の一者なり。
五界を結ぶは、われなり。
諸天界へ上昇せるは、われなり。」

6 天界への上昇

P Cは東を向いて宣言する。
「いまやI O S の神殿から、主の相貌の影に歩みださん。」
神殿の東壁の中央に扉が現れた。

P Cは、扉に向い地の象徴を描いた。
引き続き、主の第5の相貌の名前を発音する。
「ヌクバー」

緑の草原が東の壁いっぱい広がる。
P Cはためらいなく草原を歩き始める。参加者はそれに従う。

草原の上をおだやかな風が吹き過ぎ、草の波が踊る。
マルクトの影の宮の空には、やわらかな霧がたちこめている。それは神の女性的な霊気、ヌクバーと呼ばれ、シェキナーとも呼ばれる神の第五の相貌である。最も地上に近いと表現されるが最下位の相貌ではない。神の五つの相貌は、それぞれの役割を分担するアダム・カドモン、ペルソナ、ソナ、一枚に過ぎないのだ。

あなたは畏怖しながら空を仰ぐ。霧に閉ざされたなかに、髪が長く鼻梁の高い女性の横顔が見えるような気がする。その巨大な横顔の唇が開く。
唇から突風が吹き寄せ、あなたの下腹部を乱暴に叩く。下腹部に鈍い痛みとともに、右の図形が血の滲む円盤状の焼き印として浮き出る。
あなたは湿った女性の影のような気配を肌身に感じながら草原を進む。
草原の前方に丘が現れ、二本の石柱が聳えている。次の扉である。



P Cは、扉に向い風の象徴を描いた。

引き続き、主の第4の相貌の名前を発音する。
「ザウイル・アンピン」
眩い黄金の輝きが東の空を満たす。
P Cはためらいなく丘を登り始める。参加者はそれに従う。

なだらかな丘陵は、真昼の太陽に照らされていた。
あなたは畏怖しながら太陽を直視しないように空を仰ぐ。その黄金の円盤のなかに、小さな男性の横顔が滲んでいるような気がする。その横顔の唇が開く。
唇から突風が吹き寄せ、あなたの胸を乱暴に叩く。心臓に鈍い痛みを感じるとともに、右の図形が血の滲む円盤状の焼き印として胸の中心に浮き出る。
あなたは光のなかの影のような小さな貌の気配を頭上に感じながら丘陵をゆっくりと降りる。
草原に湖が現れ、石畳のすべりが湖面に向い傾斜している。次の扉である。



P Cは、扉に向い水の象徴を描いた。
引き続き、主の第3の相貌の名前を発音する。
「アイマ」
青い湖面の輝きが視界を満たす。
P Cはためらいなく湖面に下りた。参加者はそれに従う。

鏡のように静かな湖面は、翡翠色の輝きに満たされ、やわらかく訪問者の足を支えた。一瞬でも気を抜くと水の表面張力が失われ、湖底深く呑み込まれそうな不安から誰もが足下を覗き込む。やがて、翡翠色の水面の左手奥に何か不定形の貌のようなものが見えてきた。それはあまりにも深くにあるのかたちが不明瞭だが、女性の横顔のようにも見える。そして、その唇らしきものが微笑みを浮かべると、円形につぼまり吐息を吐いた。水底から一握りの泡が浮上し、水面を割り、ひとしずくの水滴があなたの左頬を叩く。
氷に触れたような鈍い痛みが左側の頬の中心を叩く。それと同時に、右の図形が血の滲む円盤状の焼き印として左頬の中心に浮き出る。
あなたは水底の貌の気配を足下に感じながら湖面を渡る。
湖の対岸が現れ、砂の道が見える。次の扉である。



P Cは、扉に向い火の象徴を描いた。
引き続き、主の第2の相貌の名前を発音する。
「アッパ」
陽炎のたつ熱砂の世界が視界を満たす。
P Cはためらいなく砂漠に入った。参加者はそれに従う。

白く枯れた砂がどこまでも広がっていた。確かに濡れていたはずの足は瞬時に乾燥し、灼けた空気が鼻腔を襲う。足下で頼りなげに砂が踊った。四周は不可思議な風紋を刻まれた砂丘が囲んでいる。右前方の砂丘の表面には、風紋で描かれた貌のような陰が見えた。その男性の横顔に見える砂絵の唇にあたる部分が動く。前方から砂混じりの風が吹きつけた。
火花を受けたように鈍い痛みが右側の頬の中心を叩く。それと同時に、右の図形が血の滲む円盤状の焼き印として右頬の中心に浮き出る。
あなたは風により変化する砂丘の貌を右目にしながら砂漠を横断した。
前方に椰子の林と水音のするオアシスが現れる。次の扉である。



P Cは、扉に向い霊の象徴を描いた。
引き続き、主の第1の相貌の名前を発音する。
「アリク・アンピン」
穏やかなオアシスに到着した。
P Cはためらいなくオアシスに入った。参加者はそれに従う。

オアシスの内部は砂漠から想像していたより遙かに広大だった。椰子の林は外周を包み込んでいたが、その内部は見たこともない鮮やかな花を咲かせた草花、瑞々しい果実を实らせた灌木が連携する庭のような風景になっている。左右に二本づつ銀色に蛇行する光の線があるのは四つの小川があるのだろうか。上空を見上げるとオアシスの中央に天蓋を提供するように巨大な積乱雲が山のように聳えている。雲を見つめると、その全体が巨大な横顔のように思えてくる。



全員が手を組み輪のなかに祭壇を包み込む。
手を放すことなく次を唱える。
全員：「主よ。われらは自らを捧げん。
わが心臓と靈魂は、汝への絶ゆることなき供物とならん。
汝が御手の技の裔を受け、汝の意志のままに与え、奪いたまえ。アーメン。」

全員、東を向く。
全員：「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！
聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！
聖なるかな、汝、廣大にして強大なる者よ！
光と闇の主よ。」

8 宮殿からの下降

P C は、至聖処の西に向かい扉をくぐる。
至聖所からエデンのオアシスに下りる。頭上の積乱雲のなかの大いなる貌が穏やかな息吹を放ち、あなたの右頬を撫でる。アrik・アンピンの紋章が消えた。あなたは砂漠に下りる。あなたが扉をくぐる都度、五つの貌の息吹を受け、対応する血の紋章の上を息が撫でていく。各階層で息吹を浴びる都度、紋章がひとつひとつ消えていく。
あなたはマルクト神殿に帰還した。

9 諸天使の出立

P C は祭壇の北に行き、南を向く。

P C：「律法の宰相の加護に感謝する。
靈の虚の場所に戻りたまえ。」

P C は再度、祭壇の西に行き、東を向く。
P C：「聖なる五つの文字に表象される長老たちよ。
I H S h V H (ヨド・ヘー・シン・ヴァウ・ヘー)
万軍の将、靈の虚の場所に住まわん。
I H V S h H (ヨド・ヘー・ヴァウ・シン・ヘー)
戴冠せる王、靈の虚の場所に住まわん。
光と闇の轆轤を逆転し、魔術師の肉体を脱ぎ捨て、光へと帰還せん。」

P C：「主よ、われらの賛歌を聞きたまえ。宇宙の韻律と調和に、感謝を捧げん。
主の聖靈は、森羅万象の上にあり、下にあり、内にあり、外にもある。
主よ、生ける靈と人の子らに、法悦と祝福を与えたまえ。
律法の宰相は、肉の衣を去れり。」

全員：「主よ、われらに祝福あれ。われらは絶えることなく汝を称えん。」

10 地上への帰還

P C：「人の子らよ。律法の宰相は、去れり。されば、地上に帰還せん。」

P C は《ヴェールを閉じる》サインを行う。
P C：「I H S h V H と I H V S h H の御名において、
この儀式により拘束されし、すべての《靈》を解放せん。」

P C：「われは宣言する。神殿作業は終了せり。」

全員：「神殿作業は終了せり。アーメン。」

神殿の外へ出る。神殿の外庭でウシャブティを解放し、光の洞窟を通過して光体は自分の部屋に戻る。静かに肉体に戻る。四肢の感覚が戻ったところで、光の法衣を脱ぐ。(特別な手順は必要ない。) 静かに目を開き、立ち上がる。
法衣を着用している場合は、沈黙のうちに着替える。

普段着に戻り、儀式についての個人的メモ（『魔法日記』用）を終わるまで、この沈黙が続けるのが望ましい。その後は、軽い食事、飲み物等を探り、地上に帰還したことを自分自身に印象づけること。

VERBORUM PUBLICA
I O S
RITUALE DE
AEQUINOCTIO VERO A

IMPRIMI POTEST: I O S
NIHIL OBSTAT QUOMINUS IMPRIMATUR
IMPRIMATUR : M.E.S.A. 5=6
MARTIUS MCMXCX

春分儀式 VE 0 6 A

Copyrights © All rights reserved I O S 2006

2006年3月19日 I O S 発行

本文書は、複数のまたは個人の団員が、魔術実践の練習のために使用するものであり、I O S の公式儀式手順書ではない。従って、本儀式を公に実施するテンプル、ロッジはその旨を会員に明確に告示する必要がある。しかし、それは同時に本文書を利用した会員の自由な実践活動を妨げるものではない。会員外の使用については、I O S の許可が必要である。本文書の著作権は団に所属する。本文書の内容の一部または全部を、団の文書による許可なく、機械的、電子的、光学的、霊的、その他の手段で複製、引用、転写することを禁じる。